

令和 6 年度 教育課程編成委員会 報告書

大阪市立デザイン教育研究所

1 今年度の取り組みに対する総括

○社会の変化に対応するために、次年度から企業の協力を得て「デジタルモデル」の授業を新設する計画と高校でメタバースを学んだ生徒対応を見据えて1年からその分野の授業を充実させる教育課程の改善策は評価できる。

○洋式トイレを整備することによって学校アンケート結果が劇的に改善していることがわかった。

○「何？」と思わせるコトをどうつくるかが大事なので、今後はそういうデザイン教育により一層取り組んでもらいたい。

○講師登録のポスターを見て素晴らしいと思った。

2 今年度のプロジェクトや授業の取り組みについて

(1) 進路支援
進路ガイダンス、面接対策、応募書類対策、報告書の改善、進路支援に関する講義などを充実させ、自己実現へのサポートを図った。
就職支援システム、ハローワークとの連携、校内での企業説明会の開催、企業訪問の機会を増やし、就職情報を充実させた。
教務部と連携を図りながら、入学志願者増への対策を行なった。

(2) 産学連携プロジェクト
企業と連携し、カーボンニュートラルな社会の実現を目指した製品開発プロジェクトに取り組んだ。製品には当該企業が開発した環境に配慮した材料を使用し、完成した製品は大阪・関西万博の企業館で販売予定。

(3) 産官学連携プロジェクト
大阪公立大学文学部心理学科と連携し、企業向けエビデンスを得るプロジェクト（ヘルプマークのプロジェクト）に取り組んだ。

(4) 1年・研高連携プロジェクト
デ研1年生26名と和歌山市立和歌山高等学校デザイン表現科生徒41名でそれぞれの学校を広報するショート動画を制作した。学校紹介動画を題材にしたことで、お互いに学校の魅力を伝え合うことができた。

(5) 2年・課題研究
課題研究はビジュアル（V）、プロダクト（P）、スペース（S）の3分野に分かれて取り組んだ。
V分野は人文科学、社会科学、理工学の3グループに分かれて研究をすすめた。とりわけ理工学グループではUI/UXやAR、VRの研究をすすめた。
P分野は内定先に捉われず、俯瞰的な視野で研究活動を進めさせている。
S分野は希望者の少ない傾向にあるが、メタバースやゲーム等の分野を取り込むことによって、受講希望者が増えてきている。

(6) IT関連
IT分野のプロジェクトでは、大阪商工会議所とURが実施主体となっている森之宮ARプロジェクトに取り組んだ。学生に3Dに興味を持たせ、AR作品の内製化も可能となった。また、IT関連企業の発表会に参加させることで、ポートフォリオ制作や就職活動の学生の励みになっている。どちらも課題は残されてはいるが、今後も継続していきたい内容である。

(7) 学校紹介
入試説明会のための広報物をデ研1年生でデザインしている。教職員目線ではない、現役の学生目線による本研究所の魅力発信につなげているとともに、工芸高校との交流授業の教材として、高校との連携においても活用している。

(8) 地域連携
地域連携プロジェクトの1つとして「天王寺みらいプロジェクト」に取り組んだ。天王寺区以外にも大阪市区長会との連携プロジェクトや生野区の「こども工作教室」への協力を通して、ものづくり教育全般につながるプロジェクトに取り組んでいる。
講師登録会ポスターへの協力も好評を得ている。

3 今後の教育課程への意見

○私は仕事として食堂のサンプルを作っている。食品サンプルの場合、おいし“そう”に見せることが重要である。デザインの分野とよく似ていると感じる部分は、特長をきちんと捉え、その部分がうまく他者の目に留まるようにアピールすることにつきて思う。産業界としてもAR技術、3Dプリンターの技術やLEDによる照明技術は将来有望だと感じている。デ研の教育内容はすばらしいので、今後も教育内容を他者にアピールしていてもらいたい。

○IT会社ではデジタルで解決できる課題はたくさんあるが、デジタルでは解決できない課題も世の中には多くあり、デ研としてはデジタルで解決できない分野も取り組んでもらいたい。デ研展を見ていて、作品そのものももちろんであるが、作品を楽しませる仕掛けが充実していると感じた。生成AIはこれから目が離せない分野であるが、データがないと何も作れないところが弱点でもある。生成AIではできないような人をワクワクさせるアイデアをデ研では育成しているので、今後、より伸ばしていったほしい。

○今回のデ研展は高校生にデザインのイメージが伝わりやすい構成、展示だったのがとてもよかった。課題研究の展示は学生一人ひとりの個性がよくわかって良いと思う。S分野の展示で建築、インテリア分野の生徒が興味を持てる効果が高かったように思う。デ研の協力で自校でもメタバースに取り組んだことを中学3年生にアピールしたところ大きな反響があった。建築分野でもXR分野で仕事をしている卒業生の講座では生徒のモチベーションが高かった。“メタバースと言えばデ研、”と思われるようにすればよいと思う。